

雲間の曙光

—『明台報』に見られる臺灣籍日本兵の戦後臺灣像—

クリスチャン・ダニエルス (唐立)
(アジア・アフリカ言語文化研究所)

A Glimmer of Light between the Clouds :
The Vision That Formosan Military Personnel Serving
in the Japanese Army Held for Post-War Re-construction
in Formosa as Seen through the *Mei Tai Hō*

DANIELS, Christian

Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa

Abstract

After the unconditional surrender of Japan in August 1945, Formosan Military Personnel (including labour conscripts) serving in the Japanese army in various parts of present-day Indonesia voluntarily left their units and established the *Taiwan Tongxiang Hui* (臺灣同鄉會) where they lived by themselves. They knew that according to the Cairo Declaration of 1943, Formosa had been returned to China, and that they were now Chinese nationals. In the *Taiwan Tongxiang Hui* at Jakarta while waiting to be repatriated, many Formosans began to learn Mandarin (國語), and in May 1946 the more intellectually inclined formed an association known as the *Mei Tai Kai* (明台會: the Association for Rationalising Taiwan) to debate the future of Formosa. After returning home, the Association planned to co-operate with the Nationalist government (中華民國政府=國民黨) on all matters concerning the political, social and economic management of the island province in order to promote the interests and welfare of all inhabitants. Though the Association simply faded away into oblivion after repatriation due to the lack of political freedom under the oppressive conditions enforced by Chen Yi (陳儀), the governor of Taiwan, we do have a record of the ideas espoused by members for they appear in the newsletter of the Association, the *Mei Tai Hō* (明台報). This is a valuable source for understanding Formosan aspirations and views before the incident of February 27 1947, and the massacre of Formosan civilians by Nationalist troops that ensued in March.

This article attempts to explain the circumstances surrounding the publication

of the *Mei Tai Hō* and to provide a rough outline of the type of ideas it carries. Information concerning the background was collected through interviews with two former members of the Association; the former Chairman, Lin Yiqian (林益謙) and a former committee member Chen Wuxiong (陳武雄), better known by his pen name, Chen Qianwu (陳千武). A reprint of all five issues of the original that are held by Chen Wuxiong follows this article. Okazaki Ikuko (岡崎郁子), associate professor at Kibi International University (吉備國際大學), has arranged the text for reprinting trying as much as possible to preserve the orthography of the original.

Members published the *Mei Tai Hō* in mimeograph form while waiting for the repatriation ship in the PWO camp for Formosans at Singapore June 1946. The five issues appeared within a few days of each other; first (18th June), second (19th June), third (20th June), fourth (22nd June) and fifth (24th June). Each issue was published as a leaflet with articles and poems in Japanese and Chinese written on both sides. About twenty people contributed to the Newsletter, and though many writers used pen names, some did sign their real names. The main contributors who can be identified include Lin Yiqian, Chen Wuxiong, Lin Hejia (林和甲), Zhang Ruiyuan (張瑞源), Xiao Zaihuo (蕭再火), Zheng Qingfu (鄭清福), Wu Peihui (吳培輝), Du Cunli (杜存禮) and Chen Youquan (陳有全).

In their contributions, writers poured forth their hopes and expectations for building a New Formosa. One author had a scheme for industrialising the island by promoting the export of agricultural produce, and even maintained that complete self-rule (完全自治) could be realised within a few years with proper preparation. Another writer felt confident that given its high level of development Formosa would become a model province for China. The main keywords that consistently appear throughout the newsletter are unification with China, the fostering of love for the country, promotion of unity and the eradication of corruption. The end of the war had fired Formosans with an ardent interest in their own future. Despite some differences of opinion, writers shared two common feelings; first, the excitement of liberation from Japanese colonial rule, and the enthusiastic anticipation that they held for the new age in which Formosans expected to become the masters of their own island and, second, a duty to unite and co-operate with the Nationalist government in building a new Formosa along the lines of the Three People's Principles of Sun Yat-sen (三民主義). But news of corruption in the Nationalist regime, particularly exploitation by Central Government officials and carpetbagging by mainlanders in Formosa brought disappointment, and caused many authors to harbour doubts about the ability of the Nationalists to govern their island.

This situation created subtle, but significant differences, in the tone of the views that members voiced. Basically writers can be divided into two groups; the first includes the optimists who merely regarded these defects as minor blemishes

that really will not seriously impair the rosy future that lay ahead, and the second encompasses the disenchanted who, though apprehensive about the Nationalists' lack of honest and efficient administration, still pinned their hopes on the glimmer of light that the Japanese defeat had radiated. Some exponents in the second group even advocated mounting a resistance movement against the government if it failed to work in the interest of Formosans. Their worst fears turned true with the incident of February 27 1947, which implanted in them an intense mistrust of mainlanders in general, and the Nationalists (國民黨) in particular. This mistrust later exercised a strong influence on political change on the island and became a prime moving force behind the overthrow of single party rule by the Nationalists, and is generally regarded as a key factor in the origin of Formosan Independence thought. But members of the *Mei Tai Kai* had expressed serious doubts about the Nationalists in June 1946, before the incident broke out, and in this sense it is an important source for tracing the genesis of post-war Formosan political thought.

はじめに

第1章 『明台報』の発行

第2章 明台會の結成と組織

第3章 明台會の設立目的

第4章 中国人になって新臺灣を建設する

第5章 送還船に乗るまで

終わりに代えて——戦後臺灣思想史の原点としての『明台報』

はじめに

古今を通じて民族の勃興国家隆昌の蔭にはその民族の不撓不屈の血と汗の跡がある。しかも其立役者は常に青年であり又是等を指導し或は勵み、又は連絡統制しそしてこれをより以上に強力ならしめる機関が必ず存在してゐる。これが民族発展行程の一つである時今回同志の結合し明台會の誕生を見たのは即ち台湾民族発展の曙光ではないかと思ふ。

今我々が当キャンプに於て台湾の現況をきく度、すべてが悲憤の至りである。五十年間の辛酸からやっと曙光かと思つたのが雲間の光にすぎず黒雲は再び覆ひかぶさつて来てゐる。

我等は不自由、不平等な圧政を又甘じて受けてなるであらうか。自分の道は自分の力で開拓する。現況は我々自分の力を以て明るい天地を開かなければならない時機である。此の責務は全島民にある。だが皆に魁りて此の責務を重く擔ひ叫合し先頭に立つこそ我々青年の任務ではないでせうか。

吳忍朗「會員としての感想」(『明台報』第3號)

1946年6月に書かれたこの言は、奇しくも戦後臺灣人が歩んだ道を見事に予言している。日本の植民地支配からの解放に歓喜し、祖国復帰を心から歓迎し、新しい国の建設に情熱を燃や

していた臺灣の知識人が希望を持てたのはほんの束の間であった。日本植民地時代に生まれ、新時代にリーダーシップを発揮しようとした臺灣のエリートは、相次ぐ政治事件で殺害されたり、志を断念させられたりする羽目になった。臺灣人は1947年に起こった二二八事件と1950年代の白色テロで国民党の意のままになり、島内で意義申し立てすら唱えられないほど従順にならざるを得なかった。この現実には当時の青年が思い描いた「自分の道は自分の力で開拓する」「明るい天地」からはほど遠い状態であった。それ故、上記の呉忍朗の言は戦後臺灣の歴史を的確に予測していると筆者がいうのである。

しかし、その予言の的確さにただ吃驚して長々と引用したのではない。その予言が、シンガポールの捕虜収容所で帰臺の船を待機していた臺灣籍日本兵¹⁾(以下臺灣兵と略す)によって物されたことに注目したい。終戦を東南アジアで迎えた臺灣兵の中には、これからの臺灣をどのように再建すればよいかを思考する者がいた。彼らは同仁を募って明台會を結成し、会員の意見交換の場として手製のニューズレターともいべき『明台報』を発行し、そこに新時代に対する希望と不安を思うがままに綴っていった。『明台報』に詩文を寄せた人々は、日本の敗戦で夜明けの明るみが見えてきたと謳歌し、それぞれが抱く新臺灣建設論を披露した。捕虜の身であり、戦後臺灣の実情を正確に把握する術はなかったが、その分未来について自由に構想を錬成することができた。だが、戦後中国の腐敗政治に関する情報を得て臺灣の将来を憂慮する論客も出現する。上記の引用文で呉忍朗が祖国復帰を「雲間の光にすぎず、黒雲は再び覆ひかぶさってきてゐる」と言っているのは、まさに中華民国政府が臺灣で如何なる政治を実現するかという危惧を表現しているのである。とにかく、収容所の中には思想統制めいたものはなく、二二八事件後の臺灣と異なって発言は自由であった。故に、『明台報』は終戦直後当時、臺灣人が如何なる新臺灣像を有していたかを知る貴重な史料であると言える。

当時の臺灣人の思想を正確に把握することは、今となってはつとに困難になっている。1987年7月15日の戒厳令解除によって、臺灣人に政治を自由に議論する時機が到来し、臺灣独立は目下大きな政治課題となっている。二二八事件や白色テロの恐怖によって沈黙を余儀なくされた関係者が当時の真相について語り始めているが、彼らは思想統制を経験したり、政治的迫害を受けたりしているため、現在において語る言は当時の彼らの思想としてそのまま受け取れるかどうかは大いに疑問がある。関係者が後から著した回顧録とは異なり、『明台報』は1946年5～6月当時の臺灣兵の偽らざる気持ちや彼らが抱いた思想を伝えているのである。上記の呉忍朗と同様に、『明台報』の多くの論客は明台會の結成に臺灣民族発展の曙光を垣間見たが、戦後臺灣における政治弾圧の歴史に照らしてみれば、それはまさに雲間の曙光に過ぎないと言える。

現在の歴史学者は、戦後の臺灣史を中国との統一か独立かといった二者択一の枠組みの中で分析をする傾向があるが、『明台報』は二二八事件によって発生する本省人(臺灣人)と外省人(戦後中国大陸からきた中国人)との対立が本格化する以前の臺灣人の思想を伝えているので、それは戦後臺灣政治思想史の出発点を把握するための絶好の史料と言える。本稿においては、『明台報』の内容を概観し、そこに掲載された詩文に見られる思想を紹介してその史料価値を指摘したい。戦後臺灣思想史の中での位置、特に二二八事件以後の臺灣人の政治思想との関連については本格的に論及する用意はないが、今後この方面の研究はつとに重要だと思われる。なお、研究者の便宜を考慮して、本稿末に岡崎郁子女史(吉備国際大学)が整理した『明台報』

1) 臺灣籍日本兵には志願兵、軍夫など日本軍に所属していたすべての臺灣人を含む。

の原文を翻刻して参考にする。

第1章 『明台報』の発行

星丘一所墳墓坪	星洲の丘、墳墓のある草原は
戦敗変成集中營	戦に敗れ、收容所と化した
營中住着健台兒	キャンプは健やかな臺灣男児で溢れ
朝晩吃草睡木棚	朝晩 草を食み、木造の小屋で休息す

（筆者訳）

富光「星洲集中營」（『明台報』第3號）

1946年5～6月、東南アジア各地に散在していた日本軍属の臺灣兵が続々とシンガポールの收容所に集合してきた。送還船を待機するためである。上記の漢詩にあるように、シンガポールの捕虜キャンプには臺灣人のみが收容されており、陳武雄の記憶では約1,000名が起居していた。『明台報』第2号に掲載された雙金の「同胞愛と同床夢」によれば、最近400名の同胞がこの收容所に到着したとあるが、正確な人数を把握するのは困難であり、とにかく少なからずの人数がいたことは確かである。だが、シンガポールに移る前、ジャカルタの臺灣同郷会及び收容所では、集団生活の規律を遵守しない者が出現し、臺灣兵捕虜全体としての士気が落ち込んでいた。これは臺灣兵は日本軍から正式に除隊されたのではなく、自分の意志で所属部隊を離れてやってきたため、收容所内で規律を強制する軍隊組織が存在していなかったことと関係していると思われる。その状態を危惧した人々が明台會という会を組織して捕虜の士気を鼓舞する目的で余興を催したり『明台報』を発行したりした。

明台會については後述するが、その名称は明理臺灣の略である。明理臺灣とは道理の通った臺灣を意味し、これから中国人として道理に叶った新臺灣を建設するという革新的な思想を含んでいる。『明台報』の名称にも同様な意味合いが託されていることは言うまでもない。『明台報』に掲載された文章に「明朗な臺灣建設」のための提案が多いのもこの趣旨に沿っているからであろう。

筆者が『明台報』の存在を知ったのは1995年3月26日、臺灣を代表する詩人・文化人である陳武雄宅を訪問した時である（図1参照）。陳武雄はシンガポールの收容所で『明台報』の発行に尽力し情熱を注いだ中心人物であり、陳が所蔵している『明台報』の現物を目の当たりにした際は大変吃驚した。二二八事件以後に行われた各種の思想統制や取り締まりでは『明台報』のような出版物を所持することはとても危険であったので、大抵の会員は破棄処分したと推測する。陳武雄がこれを焼却しないで所持し続けるにはかなりの勇気が必要であったろう。

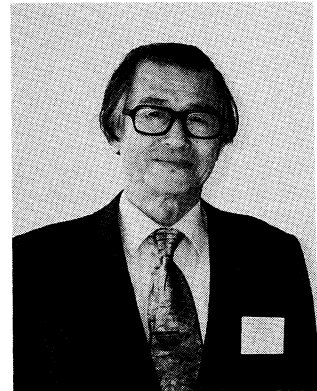


図1 陳武雄（1994年11月27日、新竹の国立清華大学にて開催された「賴和及其同時代的作家：日據時期台湾文学國際學術會議」の席上にて、岡崎郁子撮影）。

陳武雄は1922年5月1日、南投県名間郷弓鞋に生まれた。1941年3月台中第一中学校を卒業し、1942年7月から同年12月まで臺灣特別志願兵としての訓練を受けてから、1943年4月臺灣軍台南第四部隊に入隊し、同年9月、一九二三部隊臺灣歩兵第二聯隊（野戦部隊）に転属となり、同年12月17日、チモール島に上陸して濠北地区防衛作戦に当たっていた。1946年12月、豊原の八仙山林務局に就職し、後に台中市立文化中心を創設してその初代主任となった。陳はインドネシアとシンガポールでの戦争体験を『獵女犯—臺灣特別志願兵的回憶—』という自伝風小説に綴っている²⁾。中学時代から、陳千武（また桓夫）の筆名で詩を綴り続け、現在臺灣を代表する詩人として国際的に名声を馳せている。さらに、詩誌『笠』主宰者の一人として、また臺灣ペンクラブの会長として長らく戦後臺灣文学の発展に大きく寄与してきた。訪問の当日、研究用に『明台報』第1号～第5号を一部ずつ頂戴し、さらに聞き取り調査に応じてくれた。ここに氏の御協力に対して深謝の意を申し上げたい。

『明台報』は1946年6月にシンガポールの収容所で発行された。毎号、紙一枚の表裏両面を利用した謄写版刷りの出版物である。二段組みで一行の字数は不特定。後述する幹事員が英国軍からもらった紙に清書した文字を謄写版で印刷した。紙のサイズは横30.5センチ、縦25センチである。何号まで発行したかは断定しにくい、現在、陳武雄の手元に残っている号数から判断して、合計5号しか発行されていないと考えられる。陳武雄は1946年7月14日シンガポールから乗船し、同月20日基隆に到着したので³⁾、その後の発行はなかったと断言できる。毎号の発行部数は不明だが、収容所内の事情と謄写版印刷にかかる労力を考慮に入れたら、毎号40～50部ほどが印刷されたかと推定する。その発表年月日は以下の通りである。

第1号	1946年6月18日
第2号	1946年6月19日
第3号	1946年6月20日
第4号	1946年6月22日
第5号	1946年6月24日

第3号まで一日ごとに、第4号から一日おきに発行された。僅か一週間の中に5号も発行されており、『明台報』は収容所内でかなりの反響を呼んだことが窺える。

第1号から第5号まで約20人が詩文を寄稿している。主要な執筆者は林益謙、林和甲（糖業技師）、張瑞源、蕭再火、鄭清福、吳培輝、杜存禮、陳有全などであったが、筆名を使用した人が多い。例えば、陳武雄は陳千武と署名した詩の他に「屑（昨日今日の反省）」（『明台報』第4号）には子雄という筆名も用いている⁴⁾。原稿は鄭清福が清書したと陳武雄は記憶している。鄭清福は台南出身の基督教徒で、長栄中学校の卒業生である。1947年に起きた二二八事件で、銃をもって治安維持に当たっていた際、惜しくも一命を落としたようである⁵⁾。陳武雄宅には第1号の巻頭を飾った林益謙執筆「胎兒の言」の直筆原稿が残っている（図2a・2b参照）。なお、明台會の徽章も図案化されていた（図3a・3b参照）。

- 2) 1995年3月26日、台中にて、陳武雄の談話による。陳武雄の履歴については陳千武『獵女犯—臺灣特別志願兵的回憶—』（台中、熱點文化事業出版、1984年）pp. 267～268に収録されている「我的兵歴表」を参照されたい。
- 3) 陳千武『陳千武作品選集』（豊原、台中県立文化中心、1990年）、p. 77、また陳千武前掲『獵女犯—臺灣特別志願兵的回憶—』p. 268。
- 4) 前掲『陳千武作品選集』p. 77。また1995年9月30日付けの陳武雄の書簡による。
- 5) 1995年3月26日、台中にて、陳武雄の談話による。

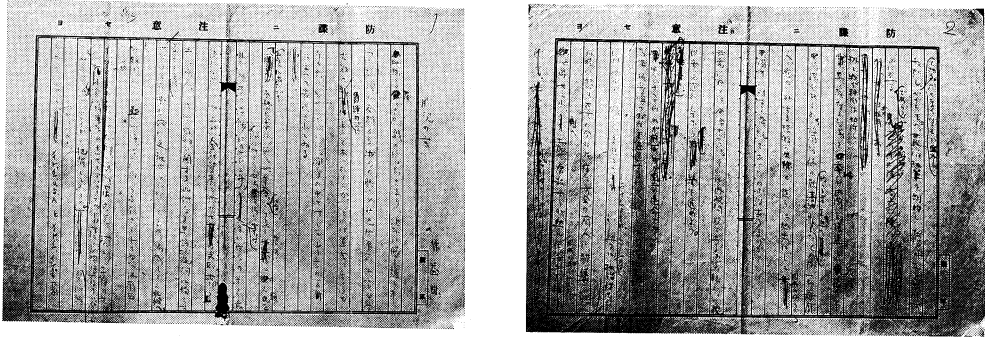


図2ab 林益謙が第1号に寄稿した「胎児の言」の直筆原稿である。陸軍の原稿用紙に「防諜二注意セヨ」の文字が見える。(陳武雄所蔵。1995年3月26日、台中の陳氏宅にて、ダニエルス撮影)

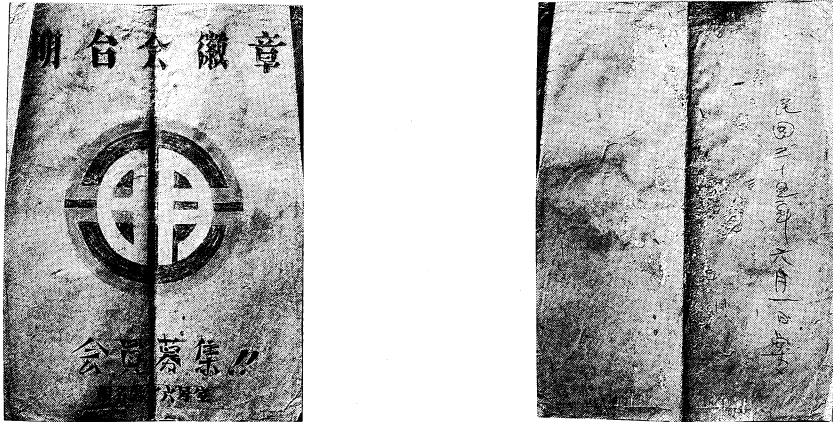


図3a 明台會の徽章。ロゴは明台の二字を象っている。図3bはその裏面。(陳武雄所蔵。1995年3月26日、台中の陳氏宅にて、ダニエルス撮影)

『明台報』には高水準の内容を有する文章が多いことに驚かされる。当時の時勢を的確に把握し、臺灣人の立場から提出された新臺灣建設論が多々掲載されているが、いずれも筋の通った論旨を展開している。論客は主義によって既成の論を繰り返すのではなく、現実を見据えて臺灣人の幸福を熟考し、具体性を伴った施政に関する意見を表明しようとしている。収容所の劣悪の条件にもかかわらず、臺灣の若い知識人は真剣で、且つ希望に満ちた眼差しで自身の未来を見つめていた。

掲載した詩文は日文と中文で書かれている。臺灣兵は日本語を使用しており、中国語を正式に学んだ人は極少であったが、わざわざ慣れない中文で文章を発表している人もいる。日本人から中国人になったことを示すためであろう。しかし、収容所には辞書やその他の参考書は具備されていなかったため、日文・中文を問わず『明台報』には誤字・俗字・異体字や仮名遣いの不統一は避けられなかった。本稿において引用する『明台報』の詩文は岡崎女史の整理した

翻刻によるものであるが、読みやすくするために、誤字・異体字を訂正したり、句読点を加えたり、〔 〕で文意を補充したりした箇所もある。

第2章 明台會の結成と組織

明台會誌の創刊号とも稱すべき本パンフレットの発行を祝する言葉として、僅か一月前に爪哇吧城のキャンプ内で明台會の結成式を挙げ、引き続き講演会を開催し、間もなく「明理台灣」の劇を演出し、今又パンフレットを発行する運び迄飛躍した事は誠に驚異的な発展振りで、會員諸氏の熱誠眞剣さに敬服する外はないと申して……（後略）

雙金「終戦後の犠牲に非らず」（『明台報』第1號）

臺灣兵捕虜がシンガポールに集合する前に、ジャカルタの収容所における規律と士気の乱れがすでに表面化していたが、上記の引用文にある如く、明台會は1946年5月ジャカルタの収容所において結成された。結成式を挙げた後、講演会を開催して「明理臺灣」と題する劇が演出された。演劇は脚本もなく、ただインドネシアで見た女性の舞踊を真似て踊ったり、即興で帰臺後したいことを劇風に演じたりしていた。これは娯楽を目的としたものだが、これから新臺灣建設のために尽力しようとした趣旨の見せ物もあったと陳武雄は記憶している⁶⁾。

『明台報』第4号の「明台會暫定章程」によれば、明台會の組織は以下の通りである。

会 長	林益謙
幹事員	吳墩燦
	陳武雄
	蕭再火
	陳慶焜
	張瑞源

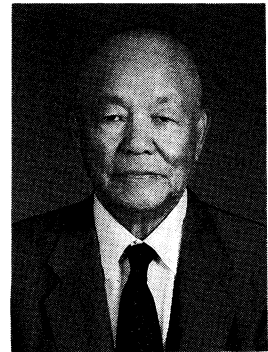


図4 林益謙
（林益謙氏提供）

同章程には明台會の本部は中部臺灣に設置するとあったが、同第4号の後記には「各州支部の幹事員は追って発表致します」とあるので、幹事員の増加を考えていたことが窺える。張瑞源は明台會の名簿を臺灣に持ち帰ったが、戦後臺灣でこのような会が許されない状況を見極めて名簿を焼却してしまったようである⁷⁾。

明台會が結成されるには会長となった林益謙(1911~?) (図4参照)の存在がとくに重要であった。林益謙は、ジャカルタやシンガポールにおいて、収容されていた臺灣人の中ではリーダー格の人物であった。何故ならば、彼は臺灣総督府の官吏を務め、またジャワには司政官として派遣されていたからである。20歳前後の大多数の臺灣兵から見れば、36歳の林益謙は尊敬すべき故郷の先輩であり、憧れの的でもあったに違いない。また、彼はジャカルタで日本軍を離れた臺灣兵によって自然発生的に形成された「臺灣同郷会」の二代目会長（初代は翁鐘賜）となり、会の安定的運営に大きく貢献している。終戦当時、林益謙

6) 1995年3月26日，台中にて，陳武雄の談話による。

7) 1995年3月26日，台中にて，陳武雄の談話による。

は南方軍ジャワ軍政監部財務部の司政官であり、日本軍から多額な資金を引き出して「臺灣同郷会」の運営に充当したため、同郷会で暮らしていた臺灣兵の待遇は捕虜という身分にしては割合によく、兵士には小遣いを支給する余裕さえあったようである⁸⁾。

林益謙は戦前の臺灣人としては異彩な経歴を有している。臺灣人ジャーナリストとして名声を馳せ、また1921年から34年まで続いた臺灣議會設置請願運動の旗手の一人としても知られる林呈祿(1887～1968)の長男として生まれ、東京で育てられ教育を受けた。林益謙は昭和8(1933)年3月東京帝国大学法学部法律科を卒業し、高等試験司法科、高等試験行政科の両方に合格して、昭和9(1934)年4月、臺灣總督府財務局金融課に勤務し始め、昭和12～14年に台南州に属する曾文郡の郡守となる以外は一貫して金融課に勤めていた。昭和17(1942)年10月府書記官に任命され、同金融課長に昇格した⁹⁾。軍政当局の要請に応じる形で、臺灣總督府によって兵隊や軍夫として東南アジアに送られた大多数の臺灣人とは異なり、林益謙はジャワ軍政監部財務部の司政官として派遣された。教育と職業から言えば、彼はまさしく臺灣人のエリート中のエリートであり、会長になるのは当然の成り行きだと思われる。

些細なことだが、明台會の会長となって困ったこともあったようである。熱血漢の若い衆は会合で臺灣語(閩南語)を使用することを主張したが、東京育ちの林益謙は日本語以外は話せず、日本語での挨拶や発言を許してもらいしかなかった¹⁰⁾。閩南語は帰臺後習得したという。

しかし、新臺灣建設のために全力を尽くす心構えはあった。終戦直後、林益謙はジャワで日本軍から日本か臺灣のどちらに行くか選択する機会を与えられた。これは彼が司政官だったことによるであろう。父の林呈祿からジャカルタに「これからは臺灣のために働け。臺灣に帰れ」といった内容の電報が届いていたため、帰臺することを決心した。この電報は林呈祿が当時の台北市長だった黄朝琴(1897～1972)に依頼して打ってもらったものらしい¹¹⁾。一旦新臺灣建設のために働こうと決心した林益謙が臺灣兵の面倒を見るのは極自然なことである。また、臺灣人としての意識は改姓名の使用中止の速さにも現れている。皇民化運動が進行すると、長谷川清総督が林益謙に林益夫(はやしますお)という改姓名をつけたためそれを使用していたが、終戦と同時に、ただちに本来の林益謙を回復していることが『明台報』から確認できる。当然ながら、臺灣兵も皆同様であると思われる。

上述した陳武雄以外、その他の幹事員の履歴はあまり知られていない。蕭再火は南投縣埔里の出身で、師範学校を卒業して教員を勤め、臺灣特別志願兵では陳武雄と同期同部隊の戦友であった。戦後埔里で印刷出版業に従事し、南投縣議会議員に再度当選して活躍した。張瑞源は台中縣の人で、戦後中連運搬公司を興し、貨物運搬業界に大きな業績を残した¹²⁾が、吳墩燦と陳慶焜については不明である。

8) 1995年9月7日、東京にて、林益謙の談話による。また、ジャカルタの臺灣同郷会の総務を務めた周義通(当時黃義通1923～?)によれば、初代会長の翁鐘賜は台南の人で、ジャワで商売をしていた。だが、軍隊の指揮系統を離れた兵隊を統率する力は、翁にはなかったという(1995年10月19日、台北にて、周義通の談話による)。

9) 興南新聞社編『臺灣人士鑑』、興南新聞社、台北、1943年、P.326及び1995年9月7日、東京にて、林益謙の談話による。

10) 1995年9月7日、東京にて、林益謙の談話による。

11) 1995年9月7日、東京にて、林益謙の談話による。

12) 1995年3月26日、台中での陳武雄の談話、及び1995年9月30日付けの陳武雄の書簡による。

幹事員が中心となって『明台報』を発行し新臺灣建設のための意見を発表した。次章で述べる如く、明台會はさらなる大きな目標に的を定めていた。

第3章 明台會の設立目的

一、本會稱名「明台會」

一、宗旨

1. 謀会友親睦團結対祖国誓矢忠誠。
2. 協助政府建設新台湾。
3. 促進三民主義的切實履行以謀同胞之幸福。

「明台會暫定章程」(『明台報』第4號)

明台會暫定章程の内容からして、明台會は単なる收容所の臺灣兵の士気を引き立て親睦を図るためにのみ結成されたのではなく、帰臺後のことについても明確な目的を有していた。すなわち、会員は臺灣建設の推進に助力したり、三民主義の実行を促進したりする役割が想定されているのである。それは会員が中華民國政府を援護・補助して臺灣同胞の幸福をはかるという理想を行動目的にしている。終戦後たった9カ月の間に臺灣兵が中華民國の政治思想を学習するようになるにはどのような背景があるのか。陳武雄の体験を事例に見てみよう。

終戦後、陳武雄の部隊はジャワ島のバンドンで治安維持に当たっていたが、後に英国軍の捕虜として当地の收容所に入った。臺灣兵は收容所から出てバンドンの臺灣同郷会(臺灣同郷会支部)に行くことが許可され、1945年11月7日、陳は20数名の臺灣兵と共に同郷会に移った。これは事実上の除隊であった。臺灣同郷会には約100名の臺灣兵が暮らしていたと記憶している。後述する如く、陳は1946年2月に同郷会で起こった事件で同じ臺灣兵に小刀で腕を切られ、治療のためにジャカルタ附近の日本陸軍病院に移されたが、同年3月5日に退院してからはジャカルタの臺灣同郷会で生活を送る。同年4月25日ジャカルタの收容所に入り、6月10日シンガポールの收容所に移るまでここにいた。ジャカルタの臺灣同郷会(臺灣同郷会の本部)で国語(北京語)を学び始めたが、最大の成果は「国父遺囑」を暗記したことである。「国父遺囑」を通じて三民主義など孫文の政治思想や中華民國の基本的立場を勉強した。この学習の成果は「明台會暫定章程」に見られるのみならず、陳個人にとっては帰臺後もそれは大いに役に立ったのである。1946年12月、陳が豊原で受けた林務局の採用試験は「国父遺囑」の暗記能力を問うものであったため、優秀な成績で合格できた¹³⁾。明台會の会員の多くは陳と似たような体験から三民主義を知るようになったと推定できる。

『明台報』の論客が明台會の理想をどのように思っていたかを概観しよう。

『明台報』第1号の「後記」には、慣れない中文で書かれた広告めいた文章がある。

明台會就是一种親睦会。……(中略)只有我們的團結明朗合作纔有光明的前途来罷。同志的兄弟們！建設光明的台湾就是我們重大的責任罷。由親睦團結了才能够進步兄弟們速起来，負擔責任奮斗，努力，合作，建設光明的台湾。有愛顧故鄉的同志們請来第二營談々我們的理想。

ここでは明るい臺灣を建設することを理想に掲げて共鳴する同志を募集している。陳武雄は

13) 1995年3月26日、台中での陳武雄の談話、及び1995年9月30日付けの陳武雄の書簡による。

第二營に宿泊していたが、そこでは意見交換や各種の議論がなされていたと想像できる。

陳有全「勇往邁進を望む」(『明台報』第5号)は理想のみならず、帰臺後会員が果たすべき役割について具体的な計画を発表している。

従来吾々は日本の重圧下に生存して来たが、吾々の諸先輩は直接間接に斗争して来たことは、今更贅言を要しない。殊に今日の台湾人は老若男女を問はず何れも斗争心に燃えて居ることを見過することは出来ないのである。此点に就き為政者にも再認識せしめる必要があることは必ずしも過言ではないと思はれる。

台湾の中堅となるべき明台会員各位が「明台会」を組織したのも之に基因するのであると思はれる。若し然りとすれば返台後各種の運動斗争に相当な難関に逢ふことは云ふ迄もないことである。勿論吾人は出鱈目に祖国の政治に反抗するのではなく、其の施政の是非を論じて決すべきである。

吾人の望む所は孫總理が主張せる三民主義の実現である。人類として生れて来た以上は民族の繁栄、生活の安定、民権の尊重・平等は當然得べき条件で、此等諸条件を侵害する者に対し吾々は断じて抗争する権利を有するのである。「明台会員」各位も「明朗な台湾建設」に直接努力し、之が実現を期する為の政府に協力することを先日の大会席上に於て暫定的な会則を決定した。宗旨より判断しても、以上の諸点を希求する外に何物もないことであらうと想像される。

果して以上の諸点を実現さしめるとすれば、前に述べた通り、今後の運動斗争に種々な干渉、追ては圧迫の魔手が伸びて来るとも限られないが、吾々は断じて之に屈伏することなく正しき理論の大通に向て勇往邁進し、

- 一、吾々の自由を束縛する者
- 二、吾々の生活安定を妨害する者
- 三、吾々の繁栄を侵略する者
- 四、吾々の政治的地位を否認する者
- 五、吾々の経済的地位を侵す者

等に対しては如何なる困難が伴ふとも断乎として抗争し排除すべきである。

陳有全は中華民国政府との条件付きの協力を主張する。その条件とは臺灣人の自由、生活安定、繁栄、政治的地位及び経済的地位を保証することである。また会員はいつでも政府に対して施政に関する意見を表明する姿勢を保持すべきだと力説する。政府から干渉あるいは弾圧を受ける場合は、臺灣人は日本植民地時代に培われた臺灣民衆の闘争心を發揮して抵抗すればよいと言い切っている。光復後の臺灣の土を未だ踏まざる人にしてはかなり警戒心に満ちた提案と言わざるを得ない¹⁴⁾。

14) 陳有全は「勇往邁進を望む」(『明台報』第5号)に以下のようにも述べている。

所が祖国に返した喜びは最近に至り悲觀的方向に転じつつあるかの如き消息が頻々と伝はって来たのに対し実に悲喜交々である。若し此の悲觀説が事実とすれば我台湾は日本帝國主義の治下にある如く再び压制下に置かるのである。

祖国より台湾に派遣して来た官吏達の考へは台湾は半世紀に涉り日本の殖民地として各方面共非常な搾取圧迫を受けて来たのであるから、今後も従来通り台湾人を圧迫し日本帝國主義

第4章 中国人になって新臺灣を建設する

日本降服をきくや南方諸域に散在してゐた我が台湾同胞は
胸中になにか知ら同一の焰を燃やしたことと思ふ。
張瑞源「和」(『明台報』第3號)

これは東南アジア各地で終戦を迎えた臺灣兵が共通して抱いた率直な気持ちであろう。『明台報』に掲載された詩文は表現こそ異なるが、植民地支配から解放されて祖国に復帰した歓喜と未来に対する希望を思うがままに述べている。論客の生身の声を聴くことにしよう。

雙金は「終戦後の犠牲に非らず」(『明台報』第1号)において次のように述べている。

南方へ出てゐる吾人は動機が志願と強制とを問はず、誰もが決して金儲に來たのでなく、大東亜戦に一命を捧げる覚悟で国を發った筈だ。日本の為にさへ捨てる命なのだ。明理台湾の為に捨てられない筈がない事を思へば、少くとも当キャンプ内の全同胞は挙って明台会に加入し、共に台湾再建に力を致すべきである。終戦後の犠牲ではない。吾人の為の眞の戦はこれからである。

具体的な計画は呈示されていないが、著者は戦争で日本に捧げた命を、今度は新臺灣建設に捧げようという忠誠を誓う対象の転換を呼びかけている。『明台報』第5号に見える「若人の苦衷」において、雙金が一步進んで中国人になる必要を力説する。

生れ乍らにして祖国を知らず、長じては日本教育を受けて來た同胞、特に若人は「人の振りを見て我が姿を直す」機会も少く、又「魚肆に居りて其臭を感じない」場合の多い様に、斯くの如き日本精神を自ら再検討する能力に乏しい事は眞に已むを得ない事と思ふ。其故に捨てるべき日本精神、乃至は日本色彩に気が付かれたならどしどし之を指摘し、警告して相共に切磋琢磨し、以て現代人として恥しくない中国人としての練成に資せられん事を希って已まない。

雙金は「現代人として恥しくない」中国人になるために、臺灣人は思い切って日本精神と日本色彩を捨てなければならないと論じている。国籍が日本から中国に転じたのみならず、個人の精神的な変容も必要であると言っている。しかし、日本教育を受けて日本精神にどっぷり漬かった臺灣人にとっては、これは反省・自己批判を伴う苦痛な仕事なので、努力して「相共に切磋琢磨」するようにも呼びかけている。

懺悔生「台湾の急先鋒」(『明台報』第2号)において、漢民族の一員としての意識がさらに鮮明に著されている。

ノと同様な政策を踏襲するのではなからうか。若し斯くの如き愚見を以て台湾統治に臨むとすれば吾々は断じて之を排除すべきである。

「我台湾は日本帝国主義の治下にある如く再び压制下に置かる」という言は、二二八事件と50年代の政治圧迫を予測しているが、陳有全は臺灣人が全く抵抗できなくなるほど事態が悪化するとは予想していなかったようである。

一、警鐘

同志の兄弟姉妹們須要知道我們是中華民族的一份子黃帝的子孫。雖然過去五十余年受了日寇之奴隸教化和剝奪（吃了同胞的膏血）政策很久中毒很深，籍此機會須要覺醒放棄洗刷一切之毒素，擺脫既往之錯誤觀念，重新恢復祖國之思想感情，大家協力來發揮力量建設真正民主的大中華民國，使國運無限的進展。這是我們重大的責任罷。……（中略）

（丙）列位兄弟們今天個々都是中華民國的一份子，要趕緊放棄日本式的生活方式（服裝，言語，起居動作）從中國的生活方式，物心兩面融化無礙使他們認識我們是真正漢民族的一份子才好。

二、曉鐘

台灣不外是大中華民國的一部，站在最重要的位置我們須要努力建設新台灣為中國的前鋒，做了他省的龜鑑，謀三民主義的切實履行為台灣同胞再進一步為全國同胞謀幸福。這應當是我會友們的理想罷。念々！！

懺悔生ざんげせいという筆名から、日本人になった過去の非を悔いて、これから中華民國のよい市民に改心しようとする姿勢が窺える。懺悔生は先ず、臺灣人はもともと歴とした「黃帝の子孫」であることを確認した上、50年間にも及ぶ日本植民地支配を受けて中国人らしさを剝奪されたが、これから日本式生活方式（服装，言語，立ち居振る舞いや動作）を改めて、中国の国語を修得し、中国の生活様式を習得することによって、中国人に我々を正真正銘の漢民族と認めてもらうのに支障がないようにせねばならぬと論じている。1945年以降、來臺した中華民國の官僚などに言われるまでもなく、臺灣兵は自分達が言語，風俗習慣及び精神においてかなり日本化されていることを自覚していた。

さらに、「曉鐘」において、懺悔生は新臺灣を建設して中国の他の省の手本になると大きな抱負を述べている。臺灣は中国国内の他の地域より早く建設できると彼は考えているが、手本となる根拠は明確にされていない。

懺悔生の意見をさらに発展させた考えかたが杜存禮の「我們的使命」（『明台報』第4号）において見出せる。

現在要建設新台灣第一个先決問題是要幫助政府把五十年来的奴化教育滅族餘毒洗雪淨盡，使我們台灣六百万同胞都知道中国是我們的祖國，我們是和祖國內的人民同種同族的，更進一步使我們的六百万同胞，不論男婦老幼都知道我們的台灣是和廣東福建一樣是中国領土，使他們曉得愛我們的中国，愛我們的民族，這是我們的新使命。青年們一同向正義光明的大路邁進，我們的口號是（1）團結一致，集中力量，把我們台灣的所有貢獻給祖國（2）幫同政府肅清国内一切貪官汚吏。

杜存禮は日本の植民地政策によって押しつけられた種族と国家とに関する誤った認識を是正するため、明台會の會員が先頭に立ち、臺灣人に我々は中国の漢民族と同種同族であり、臺灣は中国の領土であることを熟知せしめ、愛國心を育成するように指導をすべきだと主張している。それを実現するため、杜存禮は二つのスローガンを掲げた。すなわち（1）一致團結して、力を集中して臺灣のすべてを祖國に捧げる、（2）政府と協力して国内の一群の貪官汚吏を肅清する。臺灣人の使命は中国と真の統一を実現した上で、新しい臺灣を建設することであり、ま

たそのみならず、政府と協力して中国全土に蔓延する官僚の腐敗を撲滅することも責務の一つであると杜存禮は考えていた。

以上見てきた主要なキーワードは、中国との統一、愛国心の養成、団結促進及び腐敗撲滅であり、いずれもかなり漠然とした理想である。曉峰の「隨想」(『明台報』第3号)においては、もう少し具体的な政策が提示されている。

台湾は中国の一部であり、従って政治経済に関する諸施策は何れも三民主義に立脚して為さるべきであることは云ふ迄もない。従来日本帝国主義、資本主義の圧迫下にあった時代とは異なり、住民は何れも「民権」を有し、「民主」を享受する。

産業方面に就て考へれば、農業の部門に於ては適地適作主義によって増産に邁進し、台湾の特産を奨励して海外の輸出振興を図らねばならぬ。勿論上述の方針は台湾の「食糧自給」と云ふ原則によって制約されるべきである。

今後の台湾の進むべき途は台湾工業化である。日本資本主義の為に従来諸工業は興るべくして興り得なかった。紡績、日用雑貨、製造業を始め、肥料工業、機械工業等、振興すべき工業は枚挙に遑がない。

今後台湾の新建設に伴って莫大な資金を要する。従来日本領台時代の諸工場事業場を運営する丈でも尠大な資金が要する筈である。然らばこれ等の資金を如何に調達すべきであるか。浙江財閥の進出を防止せよとの意見を屢々耳にするが、大貧小貧しか居ない我が台湾に於てはこの尠大な資金を調達することは到底不可能である。資金なくして工場事業場が動き得る筈がない。卑見によれば、台湾の経済の現状よりすれば、少くとも当分の内主なる工場事業場を国营又は公営にする。〔その結果生じる〕能率の低下の眞は嚴重なる査察制度によって防止せられ得る。かくすることによって、台湾に於ける資本の個人独占を防止し得ると考へる。而して此等の事業の経営によって得た利益は、挙げて特別会計に操入れて台湾に於ける交通、教育、産業、行政に要する諸経費に充当すべきである。

台湾の完全自治を目指して今後地方自治の訓練を強力に推進せねばならぬ。自治の訓練と関聯して下部機構の整備強化は今後われわれの努力すべき問題である。従来「甲」「保」を産業治安等所有なる行政の末端組織として活用すべきである。

曉峰は中華民國の政治と経済の基本は三民主義であり、「民権」と「民主」が保証されているので、臺灣には「完全自治」が可能であるとまで言い切っている。昭和10年の市制、街庄制の改正に伴い、臺灣人が選挙によって市会と街・庄協議会に参政していたことに起因する発言であろう。これがどの程度の地方自治になっていたかは別問題だが、とにかく植民地時代において、臺灣人は10年間も地方自治に参加した「訓練」を積み重ねており、「今後地方自治の訓練を強力に推進」すれば、「完全自治」は可能だと曉峰が主張しているのであろう。また経済については、農業産品の輸出促進による工業化など戦後の臺灣経済発展の経路を予測した政策が提示されている。さらに曉峰は国营工場の査察制度や「資本の個人独占を防止」する措置も考案して公平、且つ明らかな経済体制の確立を構想していたことが明白である。

『明台報』の論客はいずれも自己反省の立場に立脚し、植民地時代の悪を除き、善を取って

臺灣人全体の幸福を前提とした新臺灣建設計画を提示している。中には、曉峰の如く、国営と公営企業の利益の一部を交通、教育、産業、行政に充当するという創造性に富んだ提言もある。また、臺灣人の役割は中国の一部として新しい臺灣を建設するに止まらず、中華民国政府と一体になって中国全土における官僚の腐敗撲滅に協力するといった論調に見られる如く、論客は雄大な臺灣未来像を描こうとしたのである。

第5章 送還船に乗るまで

- | | |
|---|--|
| <p>一、 没有邪心
 蒼空とほく
 心の純聖を保たう
 利己のみの醜体に
 私は嘔吐する
 巧みなたくらみは
 下賤のげだ
 月夜の岡で
 ——清く
 美しい琴線を鳴らさう</p> | <p>(二、は省略)
 三、 明朗合作
 健やかな愛情で
 微笑ったら
 君と僕との団結は
 至上の力だ
 たてよ——吾らの抱負
 たてよ——吾らの理想
 陳千武「会員の覺心」
 (『明台報』第1號)</p> |
|---|--|

同郷会・收容所を問わず、ジャカルタでも、シンガポールでも共同生活に協力せず、不和を起こして規律を遵守しない臺灣人が出現した。これを大変危険な行為と見て厳しく批判した明台會の会員がいる。上の詩では陳武雄（陳千武）がこのような利己主義的な考えかたを放棄して団体全体の利益を考慮・尊重するように訴えている。陳武雄が呼びかける愛情と団結は、集団生活上の暫時的な秩序安定の獲得を目指したのみならず、長期に亙る新臺灣建設をも視野に入れた切実な訴えでもありと思われる。利己主義と規律喪失の状態では健全な社会を構築することは到底できない。帰臺後、明台會の会員が施政に関して意見を表明し、理想と抱負とを實現するためには団結が必要不可欠であり、陳武雄はそれを帰臺前の段階から切に提唱しているのである。共同生活で生じた不和や規律攪乱は、一見些細なことのように見えるが、後述する如く、これは戦後の臺灣兵の思想形成に影響を与えている。本章においては、この影響を検証するために、先ず中国総領事事件を紹介し、続いて共同生活に見られる不和、非協力及び規律喪失の実情を見てみたい。

中国総領事事件とは、1946年3～4月ジャカルタで臺灣同郷会の代表団が中華民国総領事を訪問した際に起こったできごとである。団長を務めた林益謙は総領事に送還船の調達を依頼したところ、総領事は意外にも敵意を露にし、「貴様らは日本軍と一緒に来たのだから、日本人と一緒に帰れ」と協力を拒否した。止むを得ず、林益謙は南方軍の長野佑一郎中将に面会して送還船の手配をしてもらった¹⁵⁾。そのため、ジャワにいる臺灣人がシンガポールの收容所に集合して待機することになったが、中国総領事の冷淡な態度は、中国人となって未来に希望を託した臺灣兵にとっては大変なショックであり、また自国の中華民国政府との最初の交渉であっただ

15) 1995年9月7日、東京での林益謙の談話、及び1995年3月26日、台中での陳武雄の談話による。

けにその後味は悪かったようである。シンガポールでも林益謙はまた中華民国領事に面会したが、相手にしてもらえず落胆したという。雙金が「終戦後の犠牲に非らず」(『明台報』第1号)で述べているように、総領事の協力拒否は臺灣人に不満を募らせ、さらにこの事件は多かれ少なかれ臺灣兵の中華民国に対する猜疑心をも助長したと思われる。

一方、臺灣の縮図そのものである同郷会と収容所内では、利己主義的な行為を先行させた一部の臺灣兵が共同生活を攪乱し、臺灣人の間に亀裂が生じ始めていた¹⁶⁾。彼らが引き起こした様々な問題がしばしば明台會の会員を憤慨させた。先ず、雙金の「同胞愛と同床夢」(『明台報』第2号)に見られる記述を紹介しよう。

温き同胞愛の精神こそ明理台湾の原動力であり、民族主義、三民主義の基礎なのだ。

最近爪哇から空囊素手の同胞が四百名程到着し、此处のキャンプに仲間入りした。当分各地から集って来た同胞と此处で共同生活を送り、總て一緒に同じ船に乗って同じ故郷台湾へ戻るべき人々なのだ。

然るに此の無一物の同胞、殊に八十四才の老翁、婦人子供達までが丸一日経っても、一粒の御飯にも有り付けないうで、薯の葉等を代食して露命を繋いでゐた有様だ。薪もない金もない、持って来た米までも消えてゐる。

一方同室にスグ隣りに住んでゐながら、白飯に旨さうな缶詰をシコタマ食ってゐる御仁も居る。身辺にも色々と積み上げてゐる缶詰、野菜、薪等々を共同生活、同胞愛の缺けた共同生活各個自炊の共同生活は、同床異夢と評しては貧者の偏見だらうか。

ジャワでは日本の会社や金融機関などに臺灣の民間人(彼らは桜組と呼ばれていた)も勤務していた。彼らは家族を携えてシンガポールの収容所にやって来たが、食糧などに困窮していた。にもかかわらず、生活物資を保有する人々が知らぬ顔のはんべえを決め込み、少しも分かち合おうとしない。このような「温き同胞愛の精神」の欠如は臺灣兵の一部にしか見られなかったと思われるが、雙金は猛烈な不快感を覚えたのである。

もう一人の論客である子雄(陳武雄の筆名)は「屑(昨日今日の反省)」(『明台報』第4号)において、このように助け合うことをしない「団体行動に対して非常に冷淡な連中」の所業を伝えている。

慰霊祭に参列して得も云はれぬ感動に打たれた。これ以上の神聖な感情があるだらうか。敬虔なる態度しか表はせない時と場所である。だが、中途にしてそろそろ面白くないと云ふ面をして引き上げてゆく連中の気持ちをどう解釋したらいいだらう。更にこの清浄な空気の中へ麻雀のチャラチャラする音が流れて来た時――。あの崇高なる眞意の反面に又何といふ汚毒が浸み込んでゐることか?……

(中略)

16) 陳武雄はバンドンの同郷会とシンガポールの収容所を臺灣の縮図と形容している。「女軍囑」(陳千武前掲『獵女犯—臺灣特別志願兵的回憶—』) p. 227及び「縮図(代後記)」(同書) pp. 269~271を参照されたい。

皆が規則を守らなければ職を止めようといふ心情に至った會長や幹事の苦しい立場を返って面白がっている連中、提灯持ちする不健全な精神の持ち主が事情を探明せず大きな事を云って人をそしる連中、道理も糞もあるかと叫んで拳をふって見せる連中、さまざま世の中でさまざま害虫になってゐる連中、得意になるといふことは余程用心しなければ、わけもなくその人を善人と悪人に区別してしまふことを知ってゐるだらうか。

子雄は規律を攪乱する「冷淡な連中」を分類して羅列している。彼らは明台會の會員が掲げる理想に対して「道理も糞もあるか」と大声で茶化したり人を誘ったりして、明台會の會長と幹事員を辞任にまで追い込もうとするほどの妨害活動を展開したようである。林益謙は規律喪失のごたごたは記憶していないが¹⁷⁾、上記の文章によって規則不遵守が問題になっていたことは疑いのない事実だったと分かる。

次に、1946年2月バンドンの臺灣同郷会で起きた共同生活の秩序を攪乱する実例を紹介しよう。近隣のインドネシア人居住地区で安価に購入した物資をオランダ人地区で高く販売している臺灣人がいた。その犯罪行為を同郷会の力で止めさせなければ、犯人を逮捕するとインドネシアの警察が通告してきた。事態を重く見た同郷会の蕭會長（名前は不明だが台中潭子出身）はすぐ風紀委員会を開いて対策を協議し、委員の一人として陳武雄が同郷会の取るべき態度について発言した。その後、発覚を恐れた犯人は短刀でいきなり陳武雄を刺そうとしたが、幸いにして急所の左胸を外れて左腕に当たった。その後入院して繰り返手術を受けたが、今だに後遺症が残っている¹⁸⁾。

規律喪失は何故起こったのだろうか。先ず、臺灣兵が日本軍を離れた結果、集団生活を営む上で従来の軍隊組織の統制力が機能しなくなった点が挙げられる。明台會ではその権力の空白を埋めることができず、ましてや規則を遵守させる強制力はそもそもなかった。さらに、戦前の規範に代替する新しい規範ができ上がらないうちに、利己主義的な考えかたが蔓延したということも無視できない事実である。その状況の下では、一個人が無法に近い行動に出たとしても、周りの人々が物心両面から圧力をかけてそれを制裁することは困難であったと思われる。

利己主義を、規律喪失と秩序攪乱の原因と見ているのは上記の子雄である。彼は「屑（昨日今日の反省）」（『明台報』第4号）において、次のような分析を披露している。

「餘りにも利巧すぎる台湾人は強力な圧迫を以てしなければ決して統制され得ない」といふ評をきく。それは日本敗戦と同時にいろいろな形で純良な人々の心を突きさした。原因は不合理な利己主義の文句が多すぎるからではないか？何をするにしても独りよがりの傾向がある。特に悪質の方向に於て強い。そのために同郷会等では會長がただのジョンゴス〔下僕〕と等しい立場におちいったり、事務に当る人々が毒づかれたりする。台湾人はすぐ偉ぶって感謝する心を忘れてし

17) 1995年9月7日、東京にて、林益謙の談話による。

18) 1995年3月26日、台中での陳武雄の談話、及び1995年9月30日付けの陳武雄の書簡による。短刀を振るった人が、送還船の中で陳武雄に謝罪にきて、反省の色を見せたという。また、この体験は陳千武前掲『獵女犯—臺灣特別志願兵的回憶—』に収録の「縮図（代後記）」pp. 269～271に綴られている。

まふ。

ここで子雄は、臺灣人の欠点として「独りよがり」と「感謝知らず」とを指摘し、ちょっとした臺灣人論を展開する。その極めつけは次のくだりである。

漢民族の優秀性をいたづらに讚美してゐる時ではない。あの野蕃な日本人は何故に「支那人根性」を叫んで優秀な民族を侮辱したか。「支那人根性」とは何か。心酔することによって自慰してはいけないのだ。自慰することは恐しい事なのだ。

臺灣人の利己主義的な行為を「心酔することによって自慰」する「支那人根性」に喩えて厳しい批判を加えている。子雄は戦前の日本人の中国蔑視を復活しようと主張しているのではない。むしろ日本帝国主義を批判した上で、同じ漢民族の臺灣人に改善を求めるための反省を強く促しているのである。すなわち、子雄は目下の困難を克服するためには公共心と団結が必要不可欠なのに、独りよがりの自慰は相互協力と団結の妨害になるのみで役に立たないと強調しているのである。

同郷会と収容所での経験は明台會の会員に如何なる影響を与えたのであろうか。中国総領事事件は中華民國政府に対する会員の不満を募らせ、その臺灣経営に猜疑心が生まれたのは上述の通りである。第3章で紹介した陳有全の文章にある「臺灣人は自らの自由や政治・経済の地位が中華民國政府によって犯されることがあれば、断固抵抗すべき」だという考えかたの原点はこの事件であるかもしれない。また、利己主義が生んだ規律の攪乱は、団結と反省の重要性を改めて示したものの、会員が抱く新臺灣建設への意欲を少しも揺るがすものではなかった。

終わりに代えて——戦後臺灣思想史の原点としての『明台報』

台湾新建設の成否は一に「明き政治」如何にかかって居り、政治の運用の衝に当る官吏の素質、品性如何に左右せられる。従来中国に風靡せる官風は我台湾より排除さるべきであり、貪官汚吏があれば輿論を喚起して此等を駆逐すべきである。

曉峰「隨想」(『明台報』第3號)

『明台報』の論客は様々な意見を公表しているが、ほぼ全員にいくつかの共通点が見られる。まず、彼らの論調は(1)日本の植民地支配からの解放を歓喜して臺灣人が主人公となる新時代に多大の期待を寄せていること、(2)臺灣人が政治に対して発言権を有すること、及び(3)中華民國政府と協力して三民主義による新臺灣建設に全力を尽くす、という三点で一致しており、全員が未来に対して希望と抱負を抱いている。しかし、中国国内の政治腐敗や陳儀による臺灣統治の実情に関する情報¹⁹⁾に接するに及び、論客は中国の欠点、特に中華民國政府の臺灣経

19) 1995年9月7日、東京での、林益謙の談話によれば、その情報源は華僑であった。ジャカルタの華僑はラジオで世界のニュースを聞いており、彼らが得た臺灣島内や中国大陆の政治・経済に関する情報が臺灣人に伝わっていた。林益謙は日本は1945年8月15日に無条件降伏するという情報を華僑から事前に聞いていたことを記憶している。

営能力に猜疑心を募らせるようになっており、手放して喜べない側面も確実に存在する。その猜疑心を重視するかしないかで、微小ながら論客の見方には差異が現われる。すなわち、中華民国政府に対するかかる疑問を、明るい希望の中の一点の曇りに過ぎないと見做すのか、あるいは本稿の冒頭で引用した呉忍朗の文章のように、それを雲間の曙光と見るのかという異なった含みを有する二つの考えかたが確認でき、微妙に見えて実は両者には大きな相違がある。中国の欠点を明るい希望の中の一点の曇りに過ぎないと見做す場合は、希望は大きく持てるので新臺灣建設に困難があっても、それは克服できる程度の問題であるということになる。雲間の曙光と見做す場合は、中国の実情を知るに及び、あまり希望は抱けないが終戦がもたらしたそのひとすじの光を^し目指して新臺灣建設に協力していこうとする姿勢が窺える。

だが、一瞬光った東雲のあかりが二二八事件で消えてしまい、追い打ちをかけられるかのよう^のに1950年代の白色テロの時代がやってきた。明台會の会員が目指した新臺灣建設の挫折は、まさに上記の引用文で曉峰が予測した通り「明き政治」の欠如に起因している。臺灣人にとっては黒雲が再び覆いかぶさってくる時代と化してしまった。戦後、臺灣人が外省人に対して抱いた強烈な不信感がやがて政治変動に大きな影響を及ぼし、特に1970年代後半から国民党の一方独裁政治打倒の大きな原動力となり、臺灣独立思想の原点とも見做されている。このような強烈な不信感^は二二八事件によって生じたと一般には理解されているが、中華民国の臺灣を経営する能力に対する臺灣人の疑問は、1946年の6月に出された『明台報』で早くも明らかにされている。このような猜疑心は終戦直後、臺灣兵が東南アジアで祖国中国と接した体験（ジャカルタの中国総領事事件、華僑との接触²⁰及び戦後臺灣と中国の実情に関し耳にする情報）に由来しているが、『明台報』には臺灣独立を主張したり、共産主義に共鳴したりする発言は一切見られない。会員の出発点はあくまでも中華民国の枠組みの中で新臺灣を建設することである。彼らの素朴な猜疑心が二二八事件の発生によって強烈な不信感に成長し、また後の独立思想に系譜を有しているとすれば、『明台報』はまさに戦後臺灣思想史の原点を示す史料と言えよう。

明台會は陳儀の支配下で自然消滅を余儀なくされたが、それが会員のその後の人生にどのように関わったのであろうか。回答は多数の元会員を探し出して聞き取り調査を行わないと用意できないが、会長であった林益謙の場合を簡単に紹介したい。戦後、一旦曙光を眺めた林は、二二八事件の発生によって独立思想へと駆り立てられ、楊肇嘉が率いる「臺獨派」に属したが、国民党支配下では改善は望めず、また身の安全も心配になり臺灣脱出を図った。二二八事件以前、林益謙はすでに華南銀行の研究室主任になっていたが、国民党の捜査を恐れて、林が邱炳南（邱永漢）を助手に使って執筆した『財界觀察』という書物の原稿を焼却したりした。1952年に世界金融視察の名目で約6カ月東京に出張したが、1954年には東京に移住して1970年代の初めまで帰臺しなかった。しかし、林は臺灣のことを忘れてはいなかった。1972年9月の日中国交正常化に伴って、日本政府は林や林と同様の境遇にいる臺灣人に日本人に帰化する機会を与えたが、林は中華民国の国籍を離脱しなかった。終戦後、ジャワで選択した臺灣のために働

20) 1995年9月7日、東京での、林益謙の談話によれば、戦争中、ジャワの華僑は、臺灣人は日本人の手先だと思って警戒していた。「終戦後の犠牲に非らず」（『明台報』第1号）において、雙金が「華僑の脅威」と記していることから、臺灣人と華僑との間の軋轢が想定できる。しかし、臺灣同郷会では華僑を北京語の教師に招いたりしていたこともある。臺灣兵が華僑と接した色々な経験は陳千武前掲『獵女犯—臺灣特別志願兵の回憶—』に収録の小説に見られる。臺灣兵と華僑との関係を全体的に把握するためにはさらなる研究が必要である。

くという夢を捨てることはできなかったのである。現在は「臺日交流促進会」の会長として、日本人に臺灣の現状を正しく紹介する仕事に尽力している²¹⁾。

また、『明台報』の発行に情熱を燃やした陳武雄は、黒雲が覆いかぶさっていた1948年1月に誕生した長男に明台²²⁾という嘉名をつけたが、それも初心の志を放棄していなかった証拠だと筆者が密かに思っていることを最後につけ加えたい。

21) 1995年9月7日、東京にて、林益謙の談話による。楊肇嘉との関係については黄紀男口述・黄玲珠執筆『黄紀男泣血夢迴録—老牌台獨』(獨家出版社, 1991年) p. 140を参照されたい。

22) 陳明台は現在静宜大学教授で、臺灣の中堅的な詩人である。